



松戸市立松戸高の荻野薫君（1年）から神田エリカさん（2年）に連絡があったのは、春休みに入った3月下旬だった。

「春から市松に進学します。合唱部を作りたいんです。先輩、一緒にコンクールに出ませんか」

神田さんは電話口で、ポカーンとしていた。何を言われているのか、わからなかった

「音量のバランスが悪い」と指示を出す荻野君（左端）と、難しい部分の歌い方を練習する神田さん（右端）
市立松戸高校

歌いたい部作り奔走

合唱編 市立松戸高校

からだ。

2人は、同じ松戸市立松戸第一中学合唱部の出身。電話を受けた神田さんは、自身の卒業直前に入部した荻野君を思い出せず、写真を引っ張り出してやっと声と名前が一致したくらいだった。一方の荻野君は、進学先の部活動の先輩として、神田さんに狙いを定めていた。

「そうか、つくればいいのか」。迷いはなくなった。実は、神田さんもこの1年間ずっと、合唱をやりたいと思いつけていた。

市松戸の入試面談で面接官に、「合唱をやりたいなら、部をつくれれば」と言われたが、合唱部の先輩も同級生もいない。とりあえず軽音楽部に入ったが、6月には退部。家で合唱のCDを聴く日々が続き、中学の同級生が進学した合唱の強豪校、幕張総合高校の演奏を聴きに行きもした。東京・板橋の一般向けの合唱団に入り、舞台にも立つた。往復千円以上の交通費が負担で、足が遠のいた。



「中学の部活は充実していたのに、何もなくなっちゃった」。荻野君からの誘いは、そんな気持ちでもやもやしていたときだった。

5月下旬の生徒総会で同好会が承認されるまでは、校内で練習ができない。母校の教室を借りたが、後輩の部活を邪魔するようで気が引けた。

市内の「21世紀の森と広場」の敷地内にかかる橋の下が、新たな練習場所になった。

「雨にぬれにくいし、声も響く」。大変だったが、皆で歌えることがうれしかった。

部長になった荻野君がキーボードを弾きながら、リズムや音、ハーモニー、歌詞の英語発音を手チェックする自主練習が続いた。副部長の神田さんは「人数は少ないけれど、逆に一人ひとりの個性が音楽に出るからいい。1から集まった仲間と歌えるってことが、わくわくする」。

学校側のはからいで、コンクール当日は会場まで、学校の遠征バスで送ってもらった。文化部では、吹奏楽部しか使っていないバス。交通費を集めなきゃと気が重かった荻野君には、学校名を背負って乗り込めるバス送迎は、二重の喜びだった。「賞は関係ない。僕らしく、楽しんで歌えたらいい」。その言葉通り、のびのびと歌い続けた「市松合唱部」の初舞台は、笑顔の銀賞で幕を閉じた。

（永井真紗子）